

第 91 回 歴史リレー講座「^{たぶれごころのみぞ}狂心渠の真実！」 相原 嘉之氏 (R4.4.17)

「狂心渠」と呼ばれる大規模な運河の工事は、飛鳥時代の齊明天皇によって行われました。宮殿の東にある丘陵に祭祀用の石垣を造るため、^{いそのかみ}天理の石上山（豊田山）から飛鳥まで船で石材（天理砂岩）が運ばれました。平成 4 年に酒船石遺跡で天理砂岩の石垣を検出し、遺跡の東側で大規模な大溝を確認したことから、この溝が「狂心渠」と考えられています。溝は遺跡北方の大官大寺跡周辺までのびていることが判明していますが、天理から飛鳥までは具体的にどのようなルートだったのか。今回は、この「狂心渠」のルートについて考えてみたいと思います。

これにはまず、古代における水運利用の理解が必要です。当時は陸路と同様に河川交通も頻繁に利用されていました。近世の大和川では、亀の瀬で荷を積み換えた船が遡上していました。藤原宮や平城宮造営の時には船や筏で建築資材を運ぶための運河が造られ、大いに活用されました。

『日本書紀』齊明 2 年（656）の記事には、「^{ふたつきのみや}天皇は多武峰に両槻宮を造った。続いて香具山の西から石上山まで運河を掘り、これを利用して宮の東の山に石垣を建設した。船 200 隻で石を運び、工事には 7 万人もの人夫が動員された」とあります。このため、両槻宮と宮の東の山（酒船石遺跡）を同一視する研究者もいますが、文献史料だけでなく発掘調査の成果を絡めて考えれば、別物だと判断すべきでしょう。なお、この施設の必要性について、民の理解は得られておらず、大規模工事は人々を苦しめていたことから、運河のことを「狂心渠」と揶揄されたのでしょう。

さて、「酒船石」には 4 か所の窪みと細い溝が彫られています。その役割は『日本書紀』にも記されていませんが、江戸時代にはすでに飛鳥坐神社の酒造説が広まっており、本居宣長の『菅笠日記』にも登場しています。平成 4 年の発掘調査で、酒船石のある丘陵の中腹には石垣で囲まれていたことがわかりました。平成 12 年、酒船石遺跡北側谷部の調査で、亀形石槽や船形石槽などの導水施設や、石の階段・石敷などが発掘され、酒船石と同時期のものと判明しました。遺跡の規模や立地、その構造からみて、天皇祭祀に使ったようです。したがって、丘陵上の酒船石も同様の性格が考えられます。私見を付け加えれば、酒船石遺跡は律令制初期の大嘗祭を行っていた神聖な場所だったと考えています。このことは、すぐ下流にある飛鳥池工房遺跡から大嘗祭に使用する米に付けられた荷札の「次米」木簡が出土していることから補強できます。

酒船石遺跡の周辺では大溝の跡が数か所で見つかっています。飛鳥坐神社前の飛鳥東垣内遺跡では幅 10m の南北溝がみつかっており、現在でも名残と思われる水路が香具山の西まで残ります。では、石上山から香具山の西（中の川と米川合流地点）までのルートはどうでしょうか。その候補としては、3 つの可能性があります。①石上山から中の川まで直線運河、あるいは河川と河川を結ぶバイパス運河を掘削して最短距離で結ぶルートですが、現状で運河やその痕跡は確認できていません。②布留川などの諸河川を利用するのが最も効率的ですが、「狂心渠」と誇られた史実と整合性が取れません。③下ツ道の東側溝を拡幅して運河として活用し、布留川北流から下ツ道側溝、寺川・米川さらに中の川を南下して、大官大寺東側を通過するルートです。以上からは、③の下ツ道説を最有力と捉えるのが自然です。

大化の改新後に再び飛鳥に戻ってきた齊明天皇は、後飛鳥岡本宮や吉野離宮、水落遺跡（水時計台）、飛鳥京跡苑池など多くの工事を手がけました。なかでも、祭祀に用いる酒船石遺跡は天皇にとって特別な存在でした。しかし、その造営のために掘削された「狂心渠」の名が表すように、当時の人々には、重要性が理解されなかったようです。

「狂心渠」は石材運搬という本来の目的を終えたあとも、飛鳥池工房の排水や製品の運搬、藤原宮や大官大寺造営の資材運搬用に利活用されることとなります。現在でも灌漑用水路として役立っているほどです。齊明天皇は将来を見通す「先見の明」を持っていたのではないのでしょうか。